

# 文化庁月報



1981-2

No. 149

【表紙】

ロンドン

アレクサンダー・カルダー

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

## もくじ

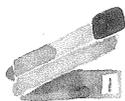
日本人の宗教観……………	金岡秀友	4
翻訳権の特例の完全廃止について……………	安達健二	6
〔随想〕		
身辺雑記——建築遺産の昨今——……………	関野 克	9
〔報告〕		
西洋博物館事情……………	原田 実	12
-----		
文化庁ニュース		
昭和56年度文化庁予算案の概要……………		15
重要無形民俗文化財の新指定等……………		16
第27回文化財防火デー(1月26日)……………		20
陶芸のパイオニア——八木一夫展——……………		21
-----		
祭礼歳時記シリーズ ⑪		
3月の祭り……………	星野 紘	22
我が県の文化行政		
“心のふれあいとうるおいを求めて”		
——岡山県の文化行政——……………	近藤信司	24
海外文化行政事情シリーズ ⑧〔CDI報告書から〕		
フランスの文化行政……………	松野 精	27
著作権シリーズ(21)		
著作権の制限		
——出所の明示と目的外利用——……………		29
国立劇場ニュース……………		31

# 西洋博物館事情



原田 実

(東京国立博物館資料部長)



一昨年の夏、わたしは在外研究員としてロンドンに四〇日ほど滞在した。大英博物館を対象に、美術資料や学術情報の収集・整理の方法についてその実情を調べるといのが目的であった。大英博物館では東洋部長スミス氏が温かく迎え入れてくれ、諸事、日本美術を専攻し日本語の達者な部員ハリス氏を相談相手とするよう、計らってくれた。

しかし、むろん大英博物館だけに腰をすていたわけではない。工芸美術の収集で名高いウィクトリア・アンド・アルバート博物館では東洋部の副部長アール氏の世話になり、研究室や修理室などを丁寧に見せてもらった。そのほか、ナショナル・ギャラリーやテート・ギャラリーを訪れたのは当然として、郵便博物館、自然史博物館、地質学博物館、科学博物館、ロンドンの博物館など、およそ博物館と名のつくものを、時間と体力の許すかぎり見てまわった。滞在半ばごろから、例の赤い二階バスと地下鉄で

そらく、研究の機会も能力もつものに平等でなければならぬという考え方が、伝統的にあるであろう。部屋はいつも静かで明るく、必要なおしゃべりはすべて小声で交わされ、落ち着いたふんい気が支配している。毎日決まった時刻にやってきて、がちりとした木製の机に向かい、一日中、古い石版画に拡大鏡をあてて眺めているいかにも一徹の学究といった風貌をもつ老人の背中が、いまでもわたしの眼に浮かんでくる。

しかし、大英博物館の表のほうにはぎやかである。ちょうど夏休みにぶつかったこともあって、世界の各地から様々な人種、そして老若男女が集まってきていた。朝一〇時、玄関前に長い行列ができる。英国では国立の博物館・美術館は観覧無料、ただ入館するときに守衛さんが観覧者のカバンの中味をあらためる。行列の中でいろいろな国語がにぎやかに飛び交い、そしてカバンのチェックを終えた陽気な守衛さんたちの「サンキュー・サー」「サンキュー・マダム」など、愛想のいい声で博物館の一日が始まる。あの著名なロゼッタ石のまわりに黒山人だかりができるのは、忽ちのうちにである。野次馬も少なくはないだろう。わたしはそうした大英博物館の表と内側を同時に見て、そのどちらかが博物館といふものの本来的な姿だと思った。九月初めのエジンバラは雨もよいで、国立博物館は濃い霧につつまれていた。ここは自然科学部門も合わせた総合博物館として運営されていて、東洋美術の陳列では東南アジアの仏教美術

大抵のところへ真つ直ぐに行けるようになった。九半月ばにロンドンを発ち、ローマ、フィレンツェ、ミュンヘン、ベルリン、パリなどの博物館、美術館を見て帰国した。それらの博物館や美術館でも多くの作品に出会い、多くの人の厚意に接したのはいうまでもない。以下はそのかなりランダムな見聞記である。

一七五九年に開館し、二百年をこえる歴史をもつ大英博物館の収蔵品のすばらしい質と量については、もう十分に紹介されており、ここにわたしが改めて書くようなことはほとんどない。わたしもあらかじめそうした書物を幾つか読み、その概要について多少知識を用意していた。しかし、それはそれとして、わたしは大変幸運であった。ちょうど当局の指示で、未登録の品物を登録するための徹底した調査が行われていて、その仕事の実際をうかがい見ることができたからである。どのセクションにもまだ調査の及んでいない作品が相当にあるという。

術に興味をそそるものがある程度だった。けれどもエジンバラは城を中心にした街そのものが波乱にとんだ歴史の証人のような趣があり、わたしは霧の中を長い間歩き回りながら、多分に一人よがりの感慨にふけっていた。

ちょうどエジンバラ芸術祭が開催中で、街のあちこちにセイジ・オザワの写真が飾られていて、懐しかった。なにかコンサートの切符を手に入れたと思ったが、それは無理だった。しかし、スコットランドのハイランドを北上して北の海岸に出、デングウォール、インバネスを経て再びエジンバラにもどる三日間のバスの旅はずばらしく、音楽が聴けなかった無念さをつぐなうて十分だった。湖と山との雄大な組み合わせ、牧草の緑とヒースの群生の紅との絶妙な諧調など、忘れがたい印象は少なくないが、ここには一つだけ、考えさせられたことを書いておく。それはスコットランドの自然と人間とのうらやましいほどの共存ぶりである。わたしたちが通った道はおそらく観光道路の一つであったはずであるが、バスで半日走っても、いわゆるドライブ・インと称する飲食兼土産物店が見当たらない。ごくたまに「ベッド・アンド・ブレイクファースト」と無雑作に木切れに書いて道ばたに立てたものを見るだけである。だから昼食などは村の宿屋でとるしかない。不便ではある。人口が少ないこともそうなっている理由なのだろう。しかしそれにしても、そこにはスポイルされない自然がそのままの姿であり、そういう自然への侵入をひかえている人たちの賢

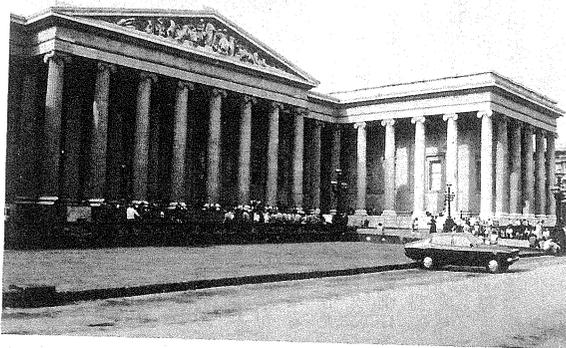
膨大な収蔵量、恒常的な人手不足が理由のようにだが、要するに「大釜の底」ということなのだろうと、感心したり驚いたりした。優秀なものも含む未登録品が次々に専門家の手で細かく調べられ、新しく戸籍を与えられていくさまは、なかなか興味深いものがあった。

調査といえは、調書や記録の類の詳細さは、この博物館の伝統の一つではないかと思う。あのセクションで見せられた記録は一八二〇年代のものであったが、一個の作品についての所見が大型の帳簿に数ページにわたって細字でびっしりと書き込まれ、挿入されたいものであった。そればかりではない。それに加えて、その品物が館有になるについての事情を語る資料―手紙や会議の議事録やメモなども保管されている。現在では写真などを使ってさすがに簡略化はされているが、調書・記録の完全さへの情熱といったものを、このスタッフは共通してもっているようである。

大英博物館の各セクションにはスチューデンツ・ルームが付属していて、外来の研究者へ便宜を提供している。この部屋を利用できるのは専門家に限られ、長期利用の場合は館長の、短期間の利用の場合は部長の許可を必要とし、部屋への出入りもチェックする職員がいてなかなか厳重であるが、一度許可をとって、部屋に入ってしまったら、文献図書類の閲覧はもとより、品物によっては直接現物が貸与されるなど、じつに大幅なサーヴィスを受けることができる。お

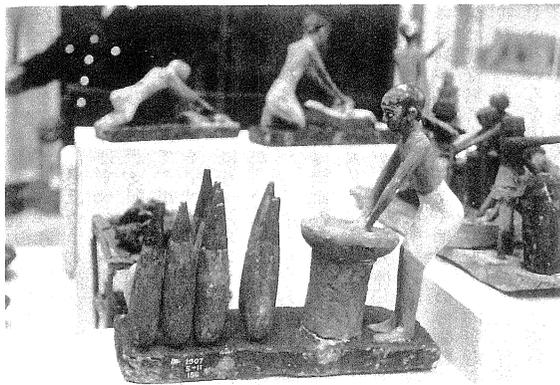
明な生活があった。そういう豊かな風光を眺め、ふりかえって自分の国の自然を思い、年毎に傷ついていくわたしたちの海や湖や川や山がかわれでならなかった。

西ベルリン、ゲーレムの国立博物館は民族学博物館、彫刻館、絵画館、版画・素描館、東洋美術館、イスラム美術館などの集合体で、それぞれが独自の活動をつづけている。わたしは東洋美術館のラーゲル館長を訪ね、同館の研究や展示の現状を見聞し、更にラーゲル博士の紹介でイスラム美術館、絵画館の館長に会い、いろ



朝の大英博物館の正面

いろいろ知ることができた。資料整備の細かい事柄については省略するが、ここでは分類や保管、情報付加について、より論理的であろうとする努力が不断に続けられていることに感銘を受けた。例えば図書や文献類の分類に色を使った視覚による検索が考えられていること、すべての作品にコードを与え、その移動や保管が研究職員でなくとも間違いなく行われるようにしていることなど、そうしたシステムの論理化への努力の結果なのだろう。論理的なシステムの有効性へのラゲール博士の確信、そして、外来の研究



たのしいエジプト彫刻の陳列(大英博物館)

者はここでどのようなサーヴィスが期待できるのかというわたしの問いに、我々の同僚として歓迎し、あらゆる資料を提供すると答えた絵画館長の静かな語り口が忘れられない。

グーレムは西ベルリンの中心部から地下鉄で二〇分ほどの静かな環境にある。その地下鉄の駅はわらぶき屋根の小さな農家風の建物で、なかなか雅味がある。そういう建物と博物館の近代的な建物とが少しの異和を感じさせないのはどういうことか、などとぼんやりした思いにとらえられながらそこを辞した。

パリのギメ博物館には尾本圭子さんがもう数年前からライブラリアンとして勤務しており、日本美術史を研究しているクリスチーナ・清水女史と彼女とで応接してくれ、またあらかじめお願いしておいたルーブル美術館への連絡もつけておいてくれた。ギメの東洋美術関係のコレクションももちろんすばらしく、見ごたえのあるものだが、ルーブル美術館の広大さも予想をうわまわる。そうして更に超現代的といっている大建造物ポンピドゥ・センターがある。六日ばかりの滞在ではなにもできないかあったのはやむをえない。ただ、フランスには国立美術館連合という組織体があり、各館の写真資料やレプリカなどはすべてその傘下にある資料センターで入手することができるようになっていて便利であるので、それにちよつとふれておく。

ウィクトル・ユーゴー通りにある資料センターを訪ねると、若い女性が業務の内容について

詳しく説明してくれる。センター長をはじめ職員的大部分は女性で、彼女たちの手で膨大な写真資料の需給事務がきびきと処理されていくのは見事であった。また、ここでも記録主義が徹底しており、資料に関して同センターが受けた通信はすべて整理、保存されているという。その一例として、かつて東京国立博物館でフランス美術展を開催した際に、写真の提供について東博館長が発した文書を見せられたが、わたしは西洋の歴史を貫流している厳然たるドキュメンタリズムの一端にふれた思いがした。

国立美術館連合では、コンピュータによる考古・美術に関する情報サーヴィス計画に基づいてシステムの設計と入力が行われ、盛んにテストを繰り返していた。若い技術者が端末機を操作し、ある型の土器が出土した場所をブラウニングに図形で映し出し、同時にそれをコピーして見せてくれた。いわゆるデータ・バンクで、我が国では、筑波大学の及川昭文氏らによって開発が進められている文化財についての情報処理と利用のシステムに近いものようだが、これが完成すれば考古遺物や美術品について誰でも容易に必要な知識の提供を受けられるようになる、と語る関係者の誇らしげで強い意気込みには、なるほど『百科全書の国』だと思わせるものがあつた。

### 編集後記

○ある生命保険会社の広告のチラシに、立春、雨水、啓蟄など、こよみと実際の氣候の差は東京でいたい何日かというクイズがありました。答えは約一か月。はや立春も雨水も過ぎましたが、まだまだ寒気は厳しいようです。それでもちりちりに乾燥した枯草の中に、輝くような緑の新芽を見つげるときがあります。春の近づきを確実に受けとめている自然の営みには驚かされます。

○昭和五十六年度予算が国会で審議されています。昨今の財政事情を反映して困難な予算編成でしたが、文化庁予算は総額三九六億三千万円。前年より若干減少していますが、これは国立歴史民俗博物館、経費が国立学校特別会計に移ったため、これを除外すると約八%の伸びで、文部省全体の四・七%を上回っています。内容的には細かいところに配慮された予算と言えるようです。

### 広告の問合せ・申込み先

株式会社 きよせい 営業課  
TEL(0)三三六八二二四二(代表)

### 「文化庁月報」二月号

(通巻第一四九号)  
昭和56年2月25日印刷・発行  
編集文化庁

〒100東京都千代田区虎ノ門3番2号  
発行所 株式会社 きよせい  
本社 千代田区中央区銀座7丁目4番13号  
営業所 千代田区新富西五軒町52番地  
電話 (0)三三六八二二四二(代表)  
振替口座 東京 九一六一番  
印刷所 (株)行政学会印刷所

年間購読料 二、一六〇円(送料共)  
定価 一八〇円(送料四五円)